2022

LA NOUVELLE

No.28
PRINTEMPS

東京外語仏友会
〒 113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト　東京外語会気付
発行責任者　藤倉洋一（1970/ 昭 45）
2022.4.1 発行

第 26 回サロン仏友会（オンライン講演会）

11 月 21 日（日）、サロン仏友会をオンライン講演会の形式で実施した。4 月の仏友会総会は、会場直接参加と WEB 参加の併用によるハイブリッド方式だったが、その後のコロナ禍の状況を観察しつつ、秋はどんな形がよいだろうかと幹事一同協議を続けた。途中、6 月に藤倉会長が脳梗塞で入院されたため、金澤副会長が会長代行として幹事会を率いる形となった。最終的にオンライン講演会のみと決めて案内したところ、40 名の会員から参加申込があった（実参加者は 32 名）。

はじめに金澤会長代行の挨拶があり、次いで和賀副会長による講師紹介の後、音楽プロデューサーの木﨑賢治氏が登場。演題は、「好きから始まった僕のプロデュースライフ」。内容については、講師本人によるまとめ記事（次項）を参照されたい。筆者の印象に残った言葉としては、「世の中に全く新しいものというのは、ない」「世の中にないものを作った人はいない」「新しいものは新しい組合せから作られる」。その例として、鉛筆と消しゴムの組合せが歴史的なヒット商品になったことや、大谷翔平選手の二刀流が挙げられ、「なるほど！」とうなった。約 70 分間の講演の後、質問タイムでも、Zoom 画面の向こうから活発な質問が寄せられた。

続いては、WEB 参加会員同士の親睦タイム。春の総会の時は、その時間が取れなかったので、今回は Zoom の「ブレークアウトルーム」の仕組みを採用してみた。参加者を 3 つの分室（バーチャル・ルーム）に振り分けて、それぞれの分室内でお互いに歓談するとともに、集合写真も各分室単位で撮ろうという趣向。ところが、この振り分け作業に思いのほか時間がかかり、会員同士の歓談の時間が十分に確保できなかった点が、やや悔やまれる。とはいえ、全体として見れば、多少のハプニングはあったものの、今回のサロン仏友会の内容には十分満足していただけたように思う。

なお、春の総会の時と比べると、参加者の中にも Zoom の利用経験のある人が増えてきたようだ。また、岩本憲和氏（1970/ 昭 45）が Zoom 操作 SOS 相談係を買って出てくださったのも、心強かった。次回こそは、リアルに対面でワイングラスを傾けられる日が復活することを祈っている。　（幹事　中村日出男記）

「好き」が仕事になってしまった

木﨑賢治（1969/ 昭 44）

この歳になってある人に音楽の話を熱く語ったら、面白いから本にしたら、と言われて集英社の人を紹介され、本＊を出すことになりました。これを機に自分を振り返りました。原点は何よりも音楽が「好き」になったことで、それ以外は、他の人達に導かれてきたのが僕の人生だと思います。

講演中の木﨑講師

中学生になってすぐアメリカン・ポップ・ミュージックに魅せられ、「好き」な余り独学で曲作りを始めました。作曲はまずは「良いなと感じる」こと、それが「どんな仕組みでグッと来るのか」を解き明かすことです。そうやって技術と知識が身につきます。それは今でも続いています。また音楽を沢山聴いてきた副産物として、英語が得意になりました。

高 3 の時、担任から「東京外国語大学という所だけど、木﨑に向いていると思うよ」と言われ、「そうですか。受けてみます」と返事をして急遽受験となりました。外語大しか受からずで、晴れて入学。先生に導かれた僕の大学生活が始まりました。

部活はバスケ部でした。やりたかったのは卓球ですが、受験勉強で悪くなった目には玉が小さすぎて、一番大きなバスケットボールを選びました。入部したら、走るのがあまりに辛すぎて、でも辞めたいと言うには先輩が怖すぎて、結局 4 年間フルに続けました。おかげで試合にも出場し、バスケットボール競技の面白さも分かって好きになり、結果「音楽とスポーツ」という実にバランスの良い生活を手に入れました。

4 年生になって就職を考えました。音楽は趣味にして、英語教師になろうと思い、出身校の駒場東邦に行って、教頭先生に雇って欲しいとお願いしました。オーケーが出て「教職は取ってこいよ」と言われました。しかしその頃から大学紛争激化で外語大は封鎖。授業がなくなり、結局教職は取れないまま卒業となりました。年内の授業再開の目途がつかないので聴講生にもなれない、ということで、英語教師になることは諦めました。

就職先も決まらず、卒業証書だけは持ってブラブラしていた時、レコード会社で働こうと思い立ち、ソニーに行ったのですが、試験はもうとっくに終わっていて、しかも新卒ではないということで簡単に断られました。そんなある日のこと、父親の会社の監査役が親戚にあたる渡辺プロの渡辺晋社長に、僕をレコード会社に紹介してもらうよう頼んでくれることになりました。ところが傍系の渡辺音楽出版社に入れられてしまいました。海外との手紙のやりとりに、外語大卒が都合良かったようです。

「楽譜でも出版しているのかな」程度の知識しか持たずに、流されるままたどり着いたこの音楽出版社にピアノが一台ありました。ある時僕が弾いていたら、ある先輩が話しかけて来ました。「木﨑はピアノが弾けるのか」それから音楽の話をするようになり、彼がこの社のレコーディング担当だと知りました。その後何回もスタジオに連れて行ってもらいました。そのうち少しずつ意見も言えるようになりました。ある会議で「木﨑は制作に向いている」の一声で突然制作に転属となりました。今度もまた先輩の一言が僕を導いてくれました。

実際、制作の仕事は僕にとても向いていたみたいです。徐々に慣れていって自分の作品が当たるようになりました。最初にヒットしたのは、沢田研二の「許されない愛」。その後もヒット曲を多く出すことができました。関わったアーティストの中に、アグネス・チャン、吉川晃司、大澤誉志幸、槇原敬之、BUMP OF CHICKEN、TRICERATOPS 等がいます。

気がつけば、音楽が「好き」という以外はあまりこだわりを持たずに生きてきた気がします。時々外語大での 4 年間は何だったんだろうと思うこともありますが、多感な青春期を通して僕の音楽表現のベースとなる感性や知性、社会性、世界観等を育ててくれたのだと気付きました。外語大生活に満足しています。そして分かりました。「人は好きなものを発信していれば、それがいつかは仕事にも結びつく」と。

さあこれからが人生の「後半戦」。好きな音楽をさらに追求しようと、僕は燃えています。

余談ですが、あの槇原敬之にシルヴィ・ヴァルタンの「アイドルを探せ」を頭だけフランス語で教えました。彼まだ歌えるかな？

＊「プロデュースの基本」（集英社インターナショナル）

問い合わせ先：（株）ブリッジ info@bridge.gr.jp

オンラインで参加した会員の皆さん

フランス人は合理的か

川竹英克（1977/ 昭 52）

もう 10 年近く前の出来事ですが、ある日、地下鉄で見知らぬ紳士から声をかけられ、「やはりフランス人は合理的なんですね」と突然言われたことがあります。当時、何かのご縁で NHK E テレの『テレビでフランス語』の放送に参加し、映像メディアに露出することへの大学人としての古典的な罪悪感と生来の小心さ、否認していたはずの凡庸な虚栄心と葛藤しつつも、有能な番組スタッフ（直接間接に外語出身者にも何人か出会いましたが）のおかげもあって、公共放送とはいえ既に国営放送へと変異したこの巨大メディアの内実の一端に触れながらもそれなりに楽しく有意義な番組制作をしていた時で、この出来事の一週前の放送において、フランスの子供は、日常的な言語活動を通していかなる成長を遂げ大人になるかという雑談をしたことがありました。

話題は、C'est quoi ?「これ何？」と Pourquoi ?「なぜ？」のふたつの疑問を子供が日常的に口ずさむことが、精神の成長の段階を形成しているというたとえ話で、言語活動を始めたばかりの幼い子供はまず、ママやパパに向かって C'est quoi ? と問いかけつつ「世界」を発見することの驚きと喜びを体験し、子供がいよいよ大人になろうという時、今度は社会に向かって Pourquoi ? と問いかけつつ社会に参加し大人としての自分を発見し開花させるのだという意味での話だったと記憶しています。

しかし、フランス人が合理的とはいったいどういうことでしょう？　たしかに、神の存在さえも論証しようと企て、近代哲学の基礎を築いたと哲学の教科書で繰り返されてきたルネ・デカルトや、あの丸山眞男が指摘するように、王権に対して自らの伝統的な権利の擁護を大義としたイギリスの市民革命とは違い、旧体制を破壊することで高邁な人類の普遍的な権利を宣言しえたフランス大革命、あるいは、慣習法ではありえない死刑廃止論をも合法化しえたフランスの成文法に基づく法体系を、人はその合理性の例として言及するかも知れませんが、フランス語を話す以外にフランス人である印はないとまで言われたこの国の人々は、フランス語を自らの存在証明とし、自らの言語に誇りを持ち、その論争的態度は、今もリセの必修科目に「哲学」の授業があるからというより、むしろ、言語活動自体が発する合理性への根源的な問いかけ、「なぜ」の無邪気な実践とともにあると言うべきかもしれません。

他方、日本語の世界は「なぜ」などと問うまでもなくすでに老成しているとでも言うべきか、社会の矛盾に向かってかつて異議申し立てをおこなった学生たちも過去の人となり、圧倒的な既成事実を前にいまさら「なぜ」などと公言するのは時代遅れと言わんばかりに、天才バカボン（赤塚不二夫）よろしく「これでいいのだ」と呟く漫画的世界が国民的アイデンティティーになって既に久しく（悟りの境地？）、今や、無根拠なまでの「エビデンス」や湿っぽい「思いやり」と姑息な「忖度」が充満し、下手に「なぜ」などと問おうものなら、「ウザい人」として知らぬ間に社会から排除されかねない危険な言葉になりつつあるかも知れず、「なぜ」と連帯することを諦め沈黙へと傾斜する人々が多数派を占めるこの国に比べれば、空虚な車道を眺めながら青信号を律儀に待ち続けるより、車が来ないなら危険を承知で赤信号を渡ることを選択する人々（良い子には理解できないでしょうが）のいる国のほうがやはり合理的なのかも知れません。Pourquoi pas !

第 26 回仏友会総会のお知らせ

◆**日時**：2022 年 4 月 24 日（日）14:00 ～ 16:30（予定）
14:00 ～総会 14:20 ～講演会 15:50 ～懇親会

◆**会場**：大手町サンケイプラザ 301 号室
（東京メトロ大手町　E1 出口）
COVID-19 の現状を考慮し、会場参加とオンライン参加を並行してハイブリッド方式で開催します。
会場入場者は 30 名ほどを見込んでいます。

◆**講師**：高田信二氏（1980/ 昭 55 卒）
ジャーナリスト、時事通信シニア嘱託

◆**演題**：「仕方なく始まった僕のジャーナリスト生活
―通信社記者 42 年―」

高田氏は、趣味の音楽、読書、歴史探索で学生時代を満喫され、時事通信に入社後は、スポーツ関係や文化全般の担当記者として「最前線の現場」を、時には意外な事実とも遭遇しながら、精力的に取材されてきました。定年後の今もシニア延長で活動されています。
今回は、同氏の豊富な取材経験から歴史的な考証を試みて「そもそも通信社・新聞社とは何か、ジャーナリズムとは何か」を大いに語っていただきます。

◆**参加費**：会場＝ 4,000 円、オンライン (Zoom) ＝無料
会場では通信費 1,000 円 / 年も同時に受け付けます。

◆**申込〆切**：4 月 15 日（金）
仏友会にメルアド登録済の会員には改めてご案内いたします。その他の会員及び会員未登録の方は下記アドレス宛てにメールでお申し込みください。

◆**申込先**：山﨑るり子　ruche_blanche@yahoo.co.jp

―「通信費」の複数年度分振り込みのお願い―

コロナ禍で通常の総会やサロンが開催できず、前回の会報発送時には振込用紙を同封できませんでした。振込手数料軽減のため複数年度分の振り込みをお願い申し上げます。

≪フランス語圏便り≫

学生時代にタイムスリップした 2022 年の年明け

安藤真由美（1995/ 平 7）

1995 年 9 月にフランス語学科を卒業し、翌年 4 月から ODA の実施機関 JICA に 18 年半勤め、その間、3 度の海外赴任で日本とアフリカ大陸を行ったり来たりしましたが、モロッコ駐在を終えた 2014 年に JICA を退職し、家族とセネガルのダカール市で生活しています。それから約 7 年半、畑違いの民間企業（商社、メーカー）や、外務省の有期雇用で在セネガル日本大使館の書記官の仕事をしていました。

海外赴任や引っ越しで家財を海外に運ぶという作業にうんざりしてしまったせいか、モロッコや日本から集結した自分の荷物の整理をずっと後回しにしていましたが、昨年末に必要に迫られて家探しをしていた時に、学生時代最後にダカールに滞在していた 1 年間と帰国後半年間に自分が書いた日記、父が生前送ってくれた私が父に宛てた手紙の束を見つけました。セネガルへの渡航前後、また現地滞在中にも父に沢山手紙を書きましたが、当時頭の中を巡っていた様々な感情や考えが、父との往復書簡と自分の日記を読み返して鮮やかに蘇り、古い記憶を取り戻したり整理したり。元来忘れっぽくて古い記憶がどんどん新しい記憶に置き換わってしまう私にとって、人生で唯一この時期に日記を書いていたのは貴重です。

当時は学生の身分（大学 4 年修了後卒業せず 1 年間休学）でセネガル人家庭にホームステイしていましたが、諸事情のため現地の教育機関での勉学を諦め、「セネガル社会の中に身を置いてみる」という滞在の目的が曖昧だったことで、アウェーの環境の中で自分の立ち位置をつかめずもがいていました。今はセネガル人と家庭を築いてセネガルに根を下ろし、育児や仕事でセネガル社会とつながり、その中で自分の居場所を見つけています。当時も今も同じセネガルにいますが、28 年を経てすっかり鎧がついて自分に自信が付いてよかったなと思います。一方、セネガルに到着したばかりのころは異文化との接触に感情が揺れ動き、様々な出来事が起こりますが、日記のほとんどは舞台がセネガルというだけで、どこにでもある日常に対する感情の吐露です。それをたどっていくと、私という人間の本質は変わっていないことに改めて気付きました。

今でこそインターネットや SNS で現地に行かずとも遠く離れた異国の地について多くの情報を得られますが、当時は、私が知りたかった専門的な研究ではないアフリカの日常について知る手段はあまりなく、私には自分で行ってその場に身を置いてみることしか思い付きませんでした。それが社会に出る一歩手前の時点で、自分に何ができて何をしたいのかを探す手段でもあったわけですが、明確な答えが見つからないまま 1 年後に帰国し、いつかセネガルに戻ってお世話になった人たちに恩返ししたい、という熱い思いだけで運よく JICA に採用してもらい、アフリカとの関わりを仕事にすることができ、今に至ります。

セネガルで生活し、見聞きしたことから得た情報は、アフリカの中のセネガルという国のごく断片的な部分でしかなかったことは、仕事として ODA に関わる中でも、また、日本で出会った夫との付き合いの中でも強く思い知らされましたが、目の前にある事象、世界を深く知りたい、理解したい、その情報を必要としている人にありのままを伝えたい、というのが仕事でもプライベートでも常に私の原動力であったことを、自分がつづった文章や父への手紙の端々に見て取り、自分を見つめ直すことができた年の瀬でした。

組織の中で出世したり、会社を興したり、NGO を立ち上げたりする才能がない平凡な私ですが、持ち前の探求心を使って今は日系企業支援の活動をしています。2017 年末に現地法人を設置したカゴメのセネガル進出を手伝い、外務省の仕事が終わった昨年 5 月以降、再びコンサルタントとして調査研究を請け負い、並行して JETRO のセネガルビジネスデスクという業務も受託しています。関心を持った対象を深く知りたい、知ったことを誰かに伝えて役立ててほしい私にはうってつけの仕事かもしれません。日系企業の役に立つことが目的なのではなく、私の仕事の成果が活用され日系企業の投資が活発化することで、現地の人々の生活が豊かになること、持続的に豊かになる手段を得られること、そういう人が一人でも増えることが、お世話になった人たちへの私なりの恩返しなのです。セネガルを理解することは、他のアフリカの国を知るための比較の視点を持つことにもなります。セネガルを拠点に西アフリカ、さらに他の地域のできるだけ多くのアフリカの国に関わる仕事をして、多様なアフリカをもっと深く知り、その発展に微力でも貢献するのがこの先 10 年くらいの私の目標です。

2020+1 を終えて

山本佳織（2019/ 平 31）

昨年夏の東京五輪でボランティア活動をしました。3 年生の終わりに平昌五輪で活動して以来（平昌の体験談は外語会会報№143 に掲載されています）、2 回目のボランティアでした。 16 日間の活動期間中、フランス選手団のアシスタントとして、選手村内で選手団の手伝いをしたり、タクシーの予約、運送業者との交渉等の場面で言語面でのサポートをしたりしました。

仏選手団担当のボランティアは日本人 3 人で（本当は 5 人でしたが 2 人ドタキャンしました）、活動日には朝から選手村の仏選手団スタッフのオフィスに行ってその都度お願いされることをこなしていました。仏選手団に仕事がない時は他の選手団の手伝いをすることもありました。

真夏のコロナ禍での開催であり、選手や選手団スタッフをコロナに感染させてはいけない、自分も体調を崩してはいけない、ということには非常に神経を使いました。とはいえ、疲れたら選手団スタッフに申告して適宜休憩する等活動時間には比較的融通が利いたので、無理なくボランティアを続けられました。また、オフィス内のテレビでフランス選手が出ている試合を選手団スタッフと一緒に観戦したり、他の選手団を手伝いに行った時にその選手団スタッフや他の選手団のアシスタントと会話したりと、コロナに気をつけつつも年齢や国籍を越えて様々な人と交流できました。

正直、多くの問題が噴出した今回の大会でボランティアをすることに迷う時期もありました。しかし、この環境下だからこそ、はるばる日本に来て試合に臨む外国人選手を支えたいとも思い、それを直接実現できたのは嬉しい経験になりました。選手村という、様々な国の選手が集まる「大きな外語祭」のような国際的な場所で過ごす時間はとても楽しく、また、学生時代にがんばって勉強した仏語を久しぶりに使う良い機会となりました。 2024 年に自由に海外渡航ができる状況になっていれば、パリ五輪にも参加したいです。

第 99 回外語祭

フランス語劇「ボヴァリー夫人」鑑賞記

三浦房子　(1976 / 昭 51)

今年度の外語祭は、初めてのハイブリッド型での開催となった。仏友会恒例の語劇鑑賞に参加したのは、会長代行の金澤さんと幹事の私の 2 名のみ。新型コロナウイルスの影響で人数制限があり、キャンパス内での企画を楽しむには語劇チケットの他にキャンパスへの入場チケットもネットから事前予約しなければならなかった。

予想はしていたものの、フェイスシールドをつけての芝居にはやはり初めのうちはちょっと違和感があった。セリフがくぐもって聞こえたのは、そのせいだろうか。幸い、日本語字幕と流ちょうなナレーションのおかげで、内容は十分に理解できた。出演者は女子学生が多く、小説や映画とは全く違う外語版「ボヴァリー夫人」であったが、学生たちの一生懸命さや努力が伝わってくる舞台だった。2 年生（約 50 人）の男女比は 1：4 ぐらいだそうで、女性が男性の役を演じるのも当たり前のことになりつつある。

終演後にアゴラ・グローバルの外で、語劇代表の倉沢麻里江さんに金澤さんより仏友会からのお祝い金が手渡された。立派なパンフレットを始め、衣装、舞台セット、小道具に至るまで全て自分たちで負担したそうで、「仏友会からの支援がとても心強い」と感謝された。

最後に、「一番苦労したことは？」という質問に対する倉沢さんの答えを載せておく。「昨年度は料理店がなく、対面授業も限られていたため、特にクラスが異なっている場合、同じ語科でもお互いのことを全く知らないという状態でした。このような状況下、まずは部署ごとに親睦会などを実施し、顔と名前を覚えるところから始めました。対面で全員集まることもなかなか難しかったため、オンラインで会議や読み合わせを行う、シーンごとのメンバーで空きコマなどの時間を合わせて練習するなどしました。大道具を使う練習が本番前一度しかなく、イメージトレーニングをするしかない、ということも多かったです。違う部署同士の人が集まる機会も少ない中、それぞれが語劇の全体像を掴みづらかったと思いますが、練習風景の映像を共有するなどしてもらえたので、最終的にはフランス語科が一つとなって舞台を作り上げられたと思います」

語劇「ボヴァリー夫人」関係者一同

外国人教師がつづる外語大の思い出（No.1）

今回から、歴代のフランス人教師の方々の回想録をシリーズでお送りいたします。最初は、1970 年代半ばから 80 年代にかけて教鞭をとられたデルモン先生です。

（なお、お楽しみいただいていた「昔日の青春 佛友會會報 80 年のタイムカプセルを開ける」シリーズは、執筆者の坂井英俊氏が療養継続中のため、21 回で終了とさせていただきます）

«Vagabondages»

Marie-France Delmont Hosaka

Il est bien étrange pour moi de me retrouver si longtemps en arrière, dans les années 70, car comme le chantait Jeanne Moreau « J'ai la mémoire qui flanche, je m' souviens plus très bien … ».

J'espère que mes anciens étudiants de l' université Gaigo, ceux qui m'ont supportée avec tant d'indulgence entre 1974 et 1986, me le pardonneront. En poste à l'Institut Français de Tokyo, enseignante à un stage pour des jeunes professeurs japonais à Shiga Kogen, Tajima sensei m'invita à donner un cours dans son université. Grâce à mes étudiants de Gaigo je redécouvrais la littérature, ils m'ont laissé le souvenir tout particulier de leur enthousiasme. Ils avaient déjà beaucoup lu en japonais et s'intéressaient comme moi aux mouvements littéraires après 1968. Je préparais mes cours avec sérieux et passion et j'étais éblouie par leurs connaissances du français. Cependant, 90 minutes c'était trop court pour échanger sur la littérature mais aussi sur les sujets qui nous animaient.

Certains étudiants étaient bien fatigués par les petits boulots qui les aidaient à financer leurs études. Je me souviens de l'un d'eux particulièrement doué qui se levait aux aurores pour décharger des fruits et des légumes au marché de Tsukiji. Nous avons donc décidé de nous retrouver le samedi matin dans un café proche de l'université, un vrai bonheur pour moi. Malheureusement le professeur alors responsable de la section de français m'a demandé de noter ces étudiants. Blessée car c'était un cours non rémunéré qu'ils suivaient en toute liberté, j'ai refusé et quelque temps après je n'avais plus que deux cours pour étudiants débutants. Je crois ne pas avoir été dès lors une professeure aussi motivée ni aussi compétente, peut-être avais-je vieilli. Les étudiants aussi avaient changé comme la politique du recrutement en université, ils étaient charmants, intelligents et sérieux mais s'intéressaient surtout à la langue orale, nous utilisions des méthodes audiovisuelles très efficaces. Heureusement sont arrivés de France de jeunes professeurs qui avaient été formés à l'enseignement des débutants, je leur ai donc cédé la place et j'ai émigré vers d'autres postes, Keio puis Waseda comme professeure invitée. Témoignages de leur intérêt pour le français l'un de mes étudiants est devenu journaliste, un autre conservateur de musée et trois professeurs de langue et littérature en université, deux ont même épousé des Françaises.

Un autre souvenir émouvant me reste, un été fin juin, j'ai pris un bateau à Yokohama pour rejoindre le transsibérien, un train de Moscou à Odessa puis un autre bateau jusqu'à Marseille, trois semaines d'aventures. Un petit groupe de mes étudiants m'a accompagné jusqu'à l'embarquement et nous nous sommes lancé des serpentins comme c'était alors la coutume. Je n'oublierai jamais mon émotion mais aussi mon étonnement quand mon voisin de bord m'a demandé si j'étais célèbre.

L'atmosphère de l'université Gaigo était internationale alors que le Japon l'était si peu, on y enseignait plusieurs langues étrangères rares et on pouvait y rencontrer des professeurs de nombreuses nationalités. Les discussions entre nous étaient toujours très animées.

Je me rendais à l'université avec ma petite voiture orange et plus tard en vélo. Sugamo avec son atmosphère "shita machi" était il y a cinquante ans un quartier de « jeunes » devenus comme moi maintenant des personnes âgées.

Mes collègues japonais étaient talentueux, intéressants et sympathiques, en particulier Iwasaki sensei avec son humour irrésistible et le professeur Asakura humaniste si chaleureux. La Maison du Japon à la Cité Universitaire de Paris invitait très souvent des écrivains célèbres, un été avec des étudiants qui étaient alors en France, nous y avons participé à une rencontre inoubliable avec Simone de Beauvoir et Jean-Paul Sartre.

Tous ces souvenirs émouvants me rappellent que c'est à Gaigodai que ma vie passionnante de professeure en université a commencé.